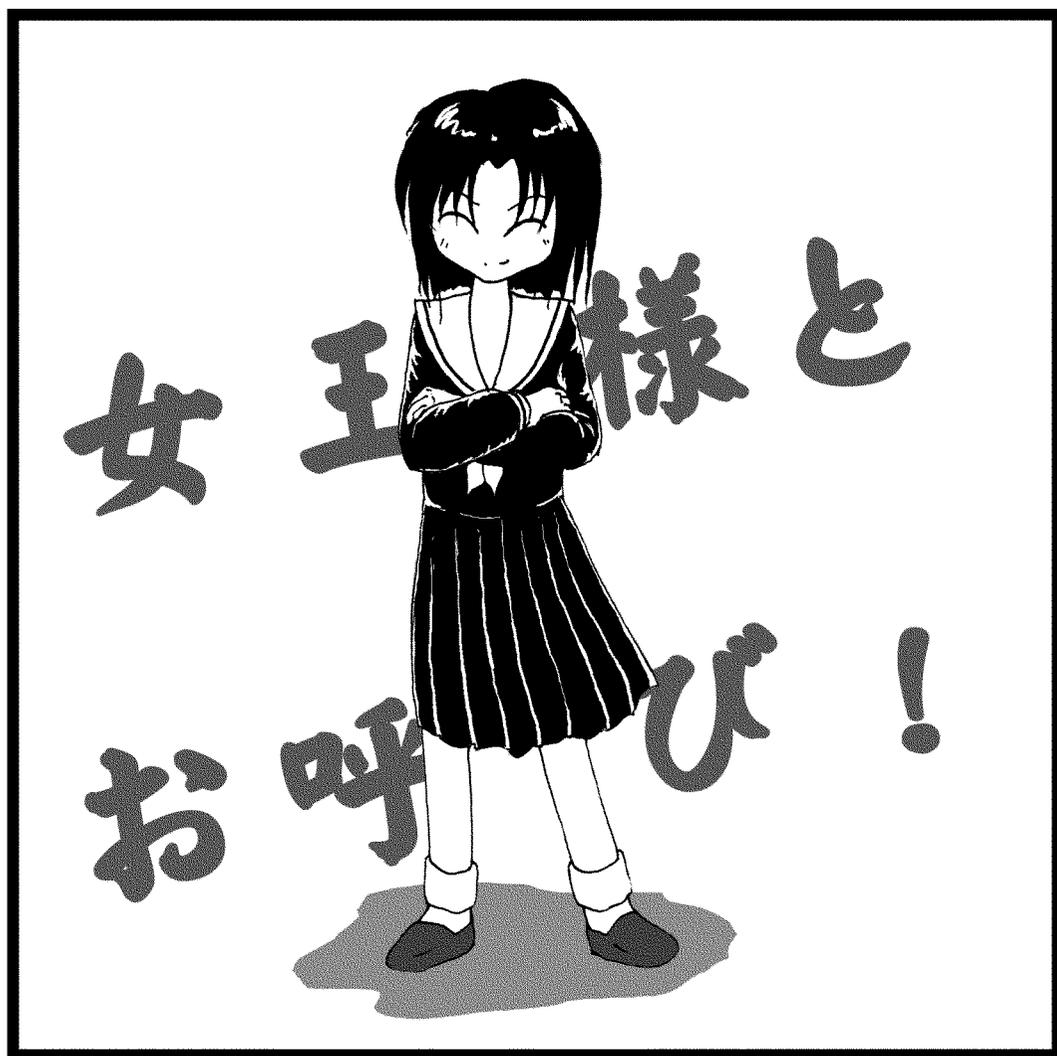


いとしき歲月

(紅薔薇さまの野望編)



って、祐巳が紅薔薇さまロサ・キネンシスに連れて行かれたのはミルクホールだった。

「さあ、遠慮しないで飲んで飲んで」

「はあ……」

勧められても、ホットミルクはそうぐびぐびとはいかないわけで。おまけに、瓶から直接飲まなきゃいけないシステムだし。祐巳がぐずぐずしている、紅薔薇さまロサ・キネンシスは声をひそめて言った。

「じゃあ、猫舌の祐巳ちゃんのために、冷ましてあげましょう」

「……って、何しているんですか!」

「何、って。見ればわかるでしょ」

紅薔薇さまロサ・キネンシスもまったら、祐巳がフーフーしながらやっところさ三分の一飲んだあつため牛乳の空いたスペースに、先刻自販機で買ってきたペットボトルの中身を注いでいたのだった。

「ド、ド、ド、ド」

「どつして、って言いたいわけ?」

そうじゃなくて。いや、それもあるけど。

なんで、なんで、よりにもよって……。

「ド、ドク　ー　ペツパーで割るんですかつ!」

せめてココ　ー　ラだったら……って、あまり変わらないような気もするけど、単体でなら美味しいコ　ー　ラと、ストレートで飲んでもアレなドク　ー　ッ　パーとでは、やっぱり事情が違う。

「嫌だ、そんな顔しないでよ。ドク　ー　ペツパーくらいで死にはしないから」

「そんなのわからないじゃないですか。死んだらどうするんですか」

「大丈夫大丈夫。祐巳ちゃんだけに辛い思いはさせないわ」

自分の牛乳にも、トクントクンと注ぐ。

「これを飲ませるために、私を誘ったんですか……?」

すると、「違つわよ」と紅薔薇さまロサ・キネンシスは首を横に振る。艶々の黒い髪が、左右の頬を一回だけ撫でて落ち着いた。

「祥子の保護者」

「はあ?」

「祐巳ちゃん」

紅薔薇さまは目を細めて小さく言った。

「祥子のことをよろしくね」

「……は……い」

「可愛げがないけれど、あれでも私にとってはかけがえのない妹なのよ」

そんな『遺言』を言い終えた紅薔薇さまは、手にした(ぬるい)ドクターペーパー牛乳を一気に口に流し込んだ。

そして

『遺言』は本当の遺言になってしまった。

* * *

後かたづけを終えた祐巳と由乃さんは、一階のつぼみたちと合流した。部屋に入った瞬間、肩を丸めた三人の姿を見て泣いているのかとびっくりした。が、そうではなかった。

「ほら、見て。紅薔薇さまの私物がたくさん」

二人に気づいた祥子さまは、笑いながら紙袋を

掲げた。

「荒縄、ロウソク、バラ鞭……？ あ、これ以前ないないって騒いでいた手錠だ！」

「祐巳さん、一つ一つ取り出さないですよ」

由乃さんが、顔を赤らめる。紙袋の中には他にもいろいろいると、コバルト検閲で詳しく書けない物まで入っていた。

「それにしても、名前が描いていないのに、どなたのかよくわかりですね」

祐巳が素朴な疑問を口にする、祥子さまは鞭を手の平にのせて頬ずりした。

「もちろん、わかるわよ。だって、いつもこれで打たれていたんですもの」

「……てゆーか、薔薇の館でこんなもの使う人、他にいないでしょ」

令さまが小声でつつこみを入れる。

一階のこの部屋は、紅薔薇さま専用の『調教ルーム』だったのだ。

「これからは、私が祐巳を調教していく番ね」

何かに言い聞かせるように、祥子さまはつばや

いた。祐巳は真っ青になる。

（紅薔薇さまっ！ 「祥子のことををよろしく」って、そーゆー意味だったんですかっ？）

祥子さまのことは大好きだけど、ちよっと興味もあるけれど……。

「わ、私、痛いのはちよっと……」

「大丈夫。すぐに気持ちよくなるわ。私もそうだったもの」

（ひええええっ！）

祐巳は、祥子さまがボンテージに身を包んで、手に鞭を持つている姿を想像する。

あまりにも、似合いすぎていた。

* * *

「えっ……!？」

驚いたのは、祐巳の方だった。

ほんの少し背伸びして、ロサ・ギガンティア白薔薇さまの唇からちよっとずれたところにあるほっぺに、こちらからチュツとやった……はずだったのに。

突然迫ってきた祐巳に驚いて、ロサ・ギガンティア白薔薇さまが顔を少し動かしたものだから、唇と唇がもろに重なってしまった。

「……祐巳ちゃん！」

予想外の展開にパニックに陥って、とんぼ返りしようとした祐巳の腕を、ロサ・ギガンティア白薔薇さまは掴まえて乱暴に抱き寄せた。

「祐巳ちゃんの方からキスしてくれるなんて……、ようやく私の思いが届いたのね！」

「ち、違いますよ！ これは事故……」

しかし言い訳しようとして開きかけた口は、再びロサ・ギガンティア白薔薇さまの唇にふさがれ、祐巳はそのまま机の上に押し倒されてしまった。

（唇の危機どころか、これじゃ貞操の危機だよー。お姉さま、助けてー！）

しかしその光景を見守っていたのは、祥子さま以外の人物だった。

* * *

(な……何やってるのよ！)

蓉子はその光景に目を見張った。

六年間通ったりリアンにお別れを言うために、放課後の校舎をぶらぶらと一周していたときのこと。

最後に足を向けたのは、大切な親友のいる教室。扉が閉まっていたので、誰か中にいるのかと近付いたところ、突然中から「カーツト！」という叫び声が出た。一瞬、映研が放送部がビデオ撮影でもしているのかと思っただけ、聞き覚えのあるその声の主は、どちらの部にも所属していない。

ほんの少し扉を開けて、中を覗いてみる。

予想通り。祐巳ちゃんが真っ赤な顔をして、扉の前に立っていた。窓際に立って笑っている聖の姿も見える。

誰もいない教室に二人きりで、しかも扉まで閉めて、いったい何をしていたのだろう。

扉の前でしばらくぶつぶつとなにやらつぶやいていた祐巳ちゃんは、両手の拳を握ると、いきなり聖の方へと駆け戻っていった。

そして

(ま……まさか！)

確かに聖と仲がいいとはいえ、あの様子一筋の祐巳ちゃんが、自分から進んで聖にキスするなんて。聖が無理やり、というのなら話はわかるが。

いったい、何があったというのだろう。

パシャツ。

すぐ後ろで、軽いシャッター音がした。

はっと振り向くと、いつの間にも忍び寄ったのか、カメラちゃんこと武嶋薦子ちゃんが立っている。もちろん、カメラを構えて。

「……薦子ちゃん」

「ごきげんよう、紅薔薇さま。ロサ・キネンシス病院に運ばれたし、たとお聞きしましたが、無事に復活なさったようです」

一瞬だけカメラを顔の前から離し、薦子ちゃんがにこっと笑う。さすがに早耳だ。あのミルクホールでの事件も知っているらしい。祐巳ちゃんと仲がいいから当然か。

「当然でしょ。クターペッパーくらいで死んで

たまりますか。七歳の頃には、サケで試してみ
たこともあるのよ。それより、今の問題はこっち
の方よ」

「ですね。先刻、祐巳さんの様子が少し変だった
ので、気になって後をつけてきたのですが」

話しながら、ぱしゃぱしゃとシャッターを切り
続ける薫子ちゃん。蓉子も教室の中の光景から目
をそらせない。

中からは、サド心をくすぐる祐巳ちゃんの悶え
泣く声が聞こえている。

「ああつ。聖つてば、そんなところまで……」

「おお、これは……」

二人はごくりと生唾を飲み込む。

「ねえ。その写真を祥子に見せたら、どうなるか
思う？」

「それは……考えるのも恐ろしいことになるで
しょうね。あのやきもち妬きの祥子さまですか
ら」

「じゃあ、写真を祥子に見せると祐巳ちゃんを脅
したら？」

にやり、と笑って蓉子は言った。シャッターを
切る手を止めて、薫子ちゃんがこちらを向く。

「……紅薔薇さまロサ・キネンシスの大好きな『調教』だろうと、

私の夢であるヌード撮影会だろうと、言いなりで
しょうね」

「でしょ？」

「ふっふっふ……」

「うふふふ……」

二人は揃って、危険な笑みを浮かべた。

* * *

明けて卒業式の朝。

晴れの日に相応しく晴天に恵まれ、娘の門出を
見守ろうというPTAも着物の裾を気にすること
なく体育館にぼちぼち集合し始めているという、
まさにその時間。

どうしよう、

どうしよう、

どうしよう、
！

祐巳は三年生の教室が並ぶ廊下を、おろおろと歩いていた。

まさか昨日のあのシーンを、見られていたなんて。

しかも、写真に撮られてさえたなんて。今朝、薫子さんから聞かされて、顔から火が出そうになった。

『写真とネガが欲しければ、あげてもいいけど……』

薫子さんは笑って言った。その隣に何故か、紅薔薇さまロサ・キネンシスが立っていた。

『いいけど。ちょっとばかり条件が条件？』

それは前々から薫子さんに頼まれていて祐巳が断り続けている、ある写真を撮らせること。そんな条件、飲めるはずがない。

かといって断れば、この写真は祥子さまの手に渡ってしまう。

福沢祐巳、人生最大の危機だった。

* * *

「どうしたの？」

前に並んでいる佐々木克美さんが訊いてくる。

聖は小さく肩をすくめた。

「ん？ いや。あまりクラスに貢献しなかったな、と思ってね」

「仕方ないわよ。聖さんは、高等部みんなのお姉さまだったんだもの」

可愛いことを言ってくれる。思わず押し倒したくなったが、ここは人目があるので慎んだ。

式の後で、人気のないところに呼び出そう。

（そして、あんなことやこんなことを……）

昨日の祐巳ちゃん結局キスだけで、ちよつと欲求不満だもんなあ。やっぱりキスだけじゃなくてその先の……）

「聖さん、前空いてるわよ」

聖の後ろ、もう一人の佐藤さんである信子さんが小声で指摘する。妄想に浸っている間に、行列は進んで前には五メートルほどの隙間ができてし

まっていた。

「悪い」

聖は後ろに声をかけて、小走りで詰める。

(本番か)

……いいかも。

ここでいう『本番』は、もちろん卒業式のことではない。

* * *

(そうそう。柏木さんも卒業か……)

江利子はふと、祥子の婚約者を思い出した。

あんな素敵な王子様は滅多にいない。

美形で頭が良くて、花寺学園の生徒会長。しかも同性愛者。

まるで、ボーイズラブ小説の登場人物そのものではないか。そんな人物が、身近に実在するなんて。

そうだ、たとえば

強面の外見に似合わずウブで純情な非常勤講師

と、美形でやり手の生徒会長のカップリング(もちろん年下攻)というのはどうだろう。

なんともそそられるシチュエーションではないか。

少し前までは柏木×ユキチのカップリングこそ最高と思っていたが、人間の気持ちなんてそんなものである。

代わりにのめり込んだのが、似ても似つかない熊男。だから人生は面白い。

(それにしても)

江利子はパイプ椅子に座りながら、自分自身で呆れていた。式の途中だというのに、執筆意欲がむくむくと湧いてくる。

ここにワープロがないのが残念だった。

* * *

緊張し始めたのは、卒業式もそろそろ終盤にさしかかった頃である。

参った、と蓉子は思った。顔にこそ出さないが、胸はドキドキしている。そして自分の動悸を意識し、ますます焦ってしまうのだ。

視線の先には、送辞を読むために前に立った祥子の姿がある。

蓉子の可愛いネコ。

りりしく美しく、そしてガラスのような透明で儂い心を持った少女。

しかも、上流階級のお嬢様。

(こーゆー子を苛めるのが興奮するのよねー)

と、蓉子のサド心をくすぐってやまない少女。

その祥子が、涙を溢れさせている。

こんな祥子の姿を見たのは、蓉子も初めてだった。

気丈な子なのに。他人に弱い部分を見せることが大嫌いな、天の邪鬼の意地っ張りなくせに。

蓉子が鞭やロウソクで苛めても、きゅっと唇を噛みしめて耐えるのが常なのに。

新鮮な光景だった。すごく興奮して、動悸が治

まらない。

今すぐ側に行つてやりたい、と蓉子は思った。

そして

(くうう、もつと泣かしてえー)

しかし送辞を受ける側の人間には、「ほらほら、もつといい声でお泣き！」と鞭で打つこともできない。

それに、ここで姉に苛められたりしたら、祥子は生徒会を率いていく自信をなくしてしまうだろう。「強がっているくせに、お姉さまの前ではマゾな子猫ちゃん」というイメージは、プライドの高い祥子にとつてあまりに屈辱的だ。

いや、待てよ。

(屈辱的……いいかも。祥子のプライドを、全校生徒の前でズタズタに……。ああ、考えただけで興奮するわ！)

しかしリリアンで過ごした六年間、薔薇の館の外では隠し通してきた蓉子の性癖を、今さら暴露するわけにもいかない。

(うう……。こんなに悔しいことは、生まれて初

めてだわ！)

血が滲むほど強く唇を噛んで、蓉子は悔し涙を流していた。

* * *

(ああ、泣いているお顔も美しい……)

祐巳は思わず、送辞を読みながら泣き出した祥子さまに見とれてしまった。

が、すぐにそれどころではないことを思い出す。

(うう……どうしよう)

あんな写真を、祥子さまに見られてしまったら、大変なことになる。

祥子さまはあれで、相当なやきもち妬きだ。

もちろん、祐巳のことで妬いてくれるのは嬉しいんだけど、雷が落ちるのはやっぱり怖い。

ふと、先月のバレンタインデーのことを思い出した。

今回はあのくらいではすまないだろう。今度こそ本当に、愛想を尽かされてしまうかも。

なんとか、その前に説明しなければならぬ。

あれは事故で、一番好きなのは祥子さまなんだ、って。

かくなる上は 由乃さんじゃないけれど。

先手必勝！

ロサ・キネンシス
紅薔薇さまと蔦子さんが、写真を祥子さまに見せる前になんとかしなければ。

祐巳は椅子に座ったまま、ぎゅっと両手の拳を握った。

* * *

陽射しが、温かい。

昇降口から外に出た瞬間、蓉子は思わず目を細めた。太陽がほぼ真上で、降り注ぐ光線を遮る雲はほとんどない。

昇降口を出たところには、山百合会の仲間達が揃っていた。

祥子、令、由乃ちゃん、志摩子、そしてどこことなく青い顔をした祐巳ちゃんと、楽しそな武嶋

薫子ちゃん。

これから山百合会のメンバーで、卒業記念写真を撮ることになっているのだ。

天候に恵まれて、よかった。傘をさしての記念写真は、シチュエーションとしては面白いけれど大変だ。

「どこで撮る？」

薫子ちゃんを加えて相談を始めると、祐巳ちゃんがこそこそと祥子を輪の中から連れだした。

(どうするつもりかしら)

非常に興味深かったので、蓉子はその場で輪の外の二人に意識を集中した。薫子ちゃんも気付かないふりをしながら、その実いつでもカメラを構えられるように胸の前に持っている。

「お……お姉さま！」

祐巳ちゃんが、いきなり祥子にキスをした。

(ほう)

けっこう度胸あるじゃないか、と蓉子は感心した。

「な、なによいきなり！」

山百合会の仲間たちと薫子ちゃん、そして新聞

部長とその妹の前でいきなりキスされた祥子は、ばつが悪いのだろう、妹に対して攻撃的な受け答えをした。

「お姉さま！ 私、お姉さまのことが大好きです！」

「あなたね」

なにやら文句を言いかけた祥子は、真っ赤になった祐巳ちゃんの迫力に圧倒されて黙った。

「……今さら言われなくても、わかってるわ」
祥子も真っ赤になって、照れ隠しにちよつと怒ったように答える。けれど、すぐに表情を崩した。

「わかってるから、こんな人前ではおやめなさい」

うれしさを隠しきれずにそう言った祥子は、とてもいい表情をしていた。

「……脅すとか調教とか言って、実は可愛い妹の

ために一肌脱いだってわけですか？」

他のメンバーが祥子と祐巳ちゃんを取り囲んで冷やかしている間に、薫子ちゃんが側に来てそつと言った。決定的瞬間を逃さずカメラに収めた彼女も、嬉しそうにしている。

「まあ、ね。こうでもしないと、あの子たちなかなか進展しないんですもの」

悪戯な笑みを浮かべて答えた。これで最後のだから、置きみやげのひとつくらいは残していきたい。

それに

「それに、私の夢のためでもあるわね」

「夢？」

薫子ちゃんが聞く。

「祥子に祐巳ちゃんも交えて、3P……よ」

ふふふつと、蓉子は妖しげな笑みを浮かべた。

終わり

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。